

第二章 目立たぬ少年

大正五年（一九一六年）四月、正芳は和田村立大正尋常高等小学校へ入学した。

小学校同級生たちの回想によると、正方は身体は大きくがっちりしていたが、温厚で辛抱強く目立たない少年だった。教師から問題を出されたとき、正芳は十分考えて確実だという自信がなければ決して手をあげなかった。ある日の授業で、大変むずかしい問題が出された。誰も手をあげるものがなかったので、しばらくして教師が「大平君」と指名すると、正芳は「ウーン」と言っただけで何も考えこみ、やがて的確な答をした。また、試験の時に盗み見るものがあると、たいていの生徒は手や頭で答案用紙をかくしたのだが、正芳は見られているのに気づいても平然としていた。スポーツはあまり得手ではなかったが、ただ相撲だけは好きで、遊び時間にはよく砂場であつていた。独特の粘りがあつて強かつたという。

この頃の子供たちにとつて、こうした学校生活はむしろ心の休まる時間だった。ほとんどの農家の子供たちは貴重な働き手として、学校がひけると、野良仕事はもちろん、役牛の世話や副業の手伝いに追われ通しの毎日がつづいていた。正芳とてその例外ではなかった。

「農民の生活は、春夏秋冬を通じてはげしい労働の連続であり、しかもその報いは乏しかった。凍土の中から萌え出る麦の芽とともに、正月が明ける。晩春、青い麦が色づく頃、苗代には稲の苗が新しい出番を待

っている。田植え、草取りが済むと炎暑を迎える。秋の収穫を終えると、やがて灰色の冬がめぐってくる。農家のげいしい労働は、こうした壮大な自然のリズムとともに繰り返されるのである」。

農家の家計は、当時まだ現物経済的な色彩が強く、療養や教育、冠婚葬祭の費用などが必要になると、地主のもとに駆けこまなければならぬ家も少なくなかった。また肥料商は多くの場合地主が兼ねており、植付けや種蒔き用の肥料を農家に供給していた。そして出来秋になってから、相当高歩の利子でこれを決済したのである。したがって、多くの農家はつねに借金を背負っていた。大平の筆によると、「私のうちもその例外ではなく、借金のことについて父母が、ひそひそ話をしているのを耳にしたこともしばしばであった」。

こういうところから、現金収入をはかるいろいろの副業が試みられた。この頃最も盛んだった副業は、麦稈真田を編むことであった。

麦稈真田は麦藁帽子の材料である裸麦の茎を、節のところを避けて、十五、六センチの長さに切断し、これを硫黄で漂白したものを三ミリほどの幅にさいて、いろいろの形に編む。子供たちはみな、学齢前からこの編み方を覚えさせられ、毎日のように帳場（ノルマ）を与えられた。これは彼らにとって悪夢のようなものであった。

「このちようばをいただいている許りに、私は予習はおるか学校の先生から言付けられている宿題をも、十分果す暇もない程であった。日暮れまで魚釣りや球技げに興じて、このちようばを完遂できなかった時には、母の前に出る事が恰も罪人が検事の前に出るように辛かったことを覚えている」。

苦しい農作業や副業、大勢の子供や奉公人をかかえた家計の苦しさ、そしてきびしい母親 家庭にはつねに、一種の緊張感がただよっていたことである。

この頃の正芳の性格について、小学校の級友の一人は、「兄の数光さんと弟の芳数さんがとてもきかん坊で取っ組み合いの兄弟喧嘩をよくしていました、その仲裁役はいつも正芳さんでした」と言っている。

また姉のムマには次のような記憶がある。

「あるとき、お父さんが大切にしていた松の木の枝が切り落とされていた。お父さんが怒って、枝をふりあげて、『誰がこんなことをやったんだ』と言つと、正芳が走って行って手をついて、『わしが知らんでやったんです。こらえてつかあさい』とへこへこ頭を下げよつた。お父さんも、『この子には怒ることもできません』と言ひよりました。ほんとうは誰がやったことやら」。

正芳は、上級学年に進むにつれて、次第に勉強が好きになつてきた。だが、参考書などは買つてもらえないので、教科書を何度も読んだ。麦稗真田を編みながらも、井戸から田へ水を汲みあげる水車を踏みながらも、教科書を読んでいる正芳の姿を見たものは多い。

しかし、むろん遊びたい盛りりの少年時代である。時には親の目をかすめて、近所の子供たちと付近の野や山を駆け巡つた。「山では松茸や筍をさがし、海では海水浴や釣りを楽しみ、小川では小魚をとることに夢中になつたものである。夜は演芸会をやつたり、時には暗闇の中で幽霊に仮装し、仲間の度胸を試す試胆会に興じたこともあつた」。

このような田園にも、社会変化の風は吹いてきていた。この地域に電灯がつきはじめるのが大正三年（一九一四年）、隣の和浜地区へ電話が入つたのが大正四年。正芳が小学校へ入学した大正五年四月には、鉄道がはじめて豊浜へも通じた。このレールに乗つて、いままで知らなかつた知識や文明が流れこんできたが、その中には、幼い正芳の心に重い疑問となつてつきささる類のものもあつた。

その一つが、当時盛んになりはじめていた都市の紡績業から伸びてきた職工募集の手であつた。これに誘われて、多くの若い男女が続々と大阪あたりに賃労働に行つた。

「……ところが、その結果、気の毒な人も出て来た。病氣（といつても主に呼吸器疾患であるが）にかか

つて、青白い顔をして田舎に帰ってきて、静養する人が見受けられるようになって来た。親達は、これ又一生懸命に子供の病気を治してやろうとして、家計をきりつめ、栄養を摂取させたりしていたものである。中には、もっと悪い病気に感染したり、都会で墮落したりして、哀れな末路になった人も皆無ではなかった。交通の発達は、また、商人の往来をも激しくした。商人は農村に入りこんで、さまざまな商売をするようになる。農民は物を買うことにも売ることにも慣れていなかったので、商人にしてやられることも少なくなかった。

次は、少年正芳の目に映った商人の姿の一つである。

「稲の刈入れや麦蒔がすんで木枯の吹く寒い頃、五、六尺にのびた砂糖キビを、掘って皮をむき、これを絞って炊いて固めて、黒い砂糖を作っていた。四斗樽に詰められた砂糖が、何本も庭先に並ぶ頃、商人が大きい天秤棒をかついでやって来る。四斗樽に詰められた砂糖を風袋込みで計るのである。天秤棒の端にかかった分銅が、十分上りきらない直前に、商人は分銅をつるした縄の根っこを巧みにひねって、何貫何百匁と宣告するのであった。子供心に、私は、もう少しその分銅が上りつめて、上下の運動が静止したところを見て、公正にその重量を計ってもらいたいものだと考えたことが度々あった。スルイ奴だと思ったが、百姓衆はこれに何の抗議もしなかった。この砂糖の商売で、数力年の間に、巨万の富を蓄えた人が、私の村にも出来たのである。」

目立たぬ少年正芳は、世の中の移り変わりを観察し、幼い、感じやすい心にそれを刻みつけていた。

世界では、第一次大戦が終わり、新しい時代が始まるうとしていた。日本はこの戦争に参戦はしたものの、主戦場であるヨーロッパの戦闘には巻き込まれず、パリ講和会議には、五大国の一つとしてこれに列席した。

さらに日本は、欧米諸国が戦争に忙殺されている間に工業を飛躍的に拡大して経済を大きく発展させ、これまで赤字に苦しんでいた対外収支は一変して大幅黒字となった。

政治的にも、また思想や文化の面でも、第一次大戦は大きな画期となった。明治二十三年（一八九〇年）の帝国議会開設以降、日本の政党は活発な活動を続けていたものの、明治維新の元老が政府を支配して、議会内の多数派が政権を握るにいたらなかったが、大正七年の米騒動は、最初の本格的政党内閣である原敬政友会内閣を生みだす契機となった。普選運動は新しい高まりを見せ、労働組合や農民組合の組織化も進み、社会主義政党も相次いで結成された。少数の知識人によって密かに日本共産党がつけられたのもこの頃であった。

原敬内閣は、その主要政綱に教育制度の発展をかけた、高等専門教育を大幅に拡大した。原内閣の高等教育機関の増設等には、高等学校、高等商業学校、高等工業学校等を二十九校と、ほぼこれまでの倍増にしたのはじめ、総合大学では学部を増設、専門学校単科大学への昇格等がふくまれていた。また、新たに大令が公布され、従来の帝国大学のほかに官立、公立の大学を認めた。こうして飛躍的に層を厚くした知識人や学生の間には、欧米の新しい思潮がつつぎと紹介され、アメリカ的デモクラシーとロシア的コムニズムがとりわけ大きな影響を及ぼした。「もちろん農民の生活の底辺には、重い生活苦と暗い争いが絶えなかったが、どちらかというとりべラルで平穩な時代であったといえよう」と大平自身は述懐している。

正芳は大正十一年（一九二三年）三月に、和田村立大正尋常高等小学校の尋常科六年を卒業して、そのまま高等科の一年に進んだ。一歳年上の兄の数光は、すでに前年に同じく高等科に進んでいた。数光はそこを卒業して、家業を継ぐという方針だった。正芳は、尋常科卒業と同時に中学へ進学したかったが、家計と周囲の事情がそれを許さなかった。

当時、一般の農家の子弟は、義務教育の六年間の小学校か八年間の小学校高等科を卒業しただけで家業を継ぐか実社会に出るかするのがほとんどで、よくても、商業、工業系の実業学校、農業学校等の上級学校へ進んで職業課程だけで終わるのがせいぜいであつた。中学校進学ということは、さらに上の高等教育課程への進学を意味する。小学校の四十数人のクラスの中で、中学進学者は多くても二、三人、それもボンサンと呼ばれた富裕な地主の子が主であつた。

そういう状況の中で正芳が中学進学を志したことについて家族の証言を総合すると、父利吉の「二、三男には分けてやれるものもないから、せめて学問ぐらいさせてやろう」という判断と、それにふさわしい正芳の成績、そして、おそらくこれが最も重要な要素であるうが、弟のすぐれた資質を見ぬいていた兄数光の意思があつたものと考えられる。こうして正芳は、数光が高等科を卒業して家の仕事に専念できるようにすると同時に、中学進学の希望をかなえられることとなつた。

目指すは、観音寺町（現観音寺市）にある香川県立三豊中学校（現観音寺第一高等学校）である。入試にはどうあつてもパスしなければならぬ。そこで、彼は、隣校である豊浜町立豊浜尋常高等小学校の一人の女教師を、受験勉強の師とすることとした。彼女はこう書いている。

「学校が新学年をむかえたばかりの四月三日、さっぱりした紺がすりの着物を着た少年が一人で私を訪ねてきた。そしていきなり「勉強教えてください」とそれだけ言つた。私はいろいろたずねてみて、この少年が大平利吉さんの次男坊だということと、高等小学校の一年生で、来春は三豊中学（旧制）に進学の希望を持つていることを知つた。

大平さんの家は私の家から一キロあまり離れた長谷集落にあつて、以前からお互いに知り合つてはいたが、こんなほつぺたの赤いおっとりした少年があることは少しも知らなかつた。ちょうど二、三日前から勉強にきていた近所の少年がいたので、私は大平少年の学習も一緒にみてあげることにした。

その翌日から二少年は私の家の夕食が終るころ前後して勉強に來た。そしてそれが一年三百六十五日、一日の休みもなくつづいた。今考えてみると、よくもあきなかつたものだと思う。雪のふる夜、大平さんは赤げつとをかぶつてやって來た。ある秋の台風のはげしい夜、主人が「さすがの正芳君も今夜は休んだらしい」と言つたとたん、入口の戸があいた。私たちがおどろいていると、「川は水一ぱいだったので梶谷をまわつてきました」とおそくなつたことをわびた。

一緒に学んだ少年の回想によると、正芳は難かしい問題が出されて、できないと、「よほどくやしかつたのか、ポロポロと涙を流していました。それは非常に負けん気が強い一つの現われではなかつたかと思ひます……」ということである。

入試を無事にパスして、正芳は三豊中学に進むことになった。

大平正芳に関する三豊中学の学籍簿には、正芳の小学校時代の最終成績が記入されている。「修身」10、読方」10、書方」10、綴方」10、算術」10、歴史」10、地理」10、理科」8、体操」10。そしてよくなかつたと言われている唱歌は「9」、席次は四十八人中二番であつた。家庭事情としては、同居が兄一、弟一、妹一、其他下男一人、下女一人とある。

また注目すべきは、将来の希望を記入する「志期」という欄に、「父兄」による記載はなく「本人」の意志として「官吏」と記されていることである。中学入学時点で正芳がどのような「官吏」像を描いていたのか、それは判らない。身のまわりに見る教員、警察官、鉄道員、地方の役所の吏員などを思い描いたものが、それとも、中央官庁のエリート官僚像を頭に浮かべていたものか、いずれにしても、まだ、官が「お上」であつた時代に、少年正芳は自らの将来の希望をどのように記し、やがて、この時心に期した道を進むようになっていくのである。

三豊中学は、明治三十三年（一九〇〇年）三月に香川県立丸龜中学校（現丸龜高校）の分校として誕生、三年後の明治三十六年に独立し、香川県立三豊中学校として開校したものである。戦後の学制改革で香川県立観音寺第一高等学校となり、中央、地方で活躍する多数の人材を輩出している。この観音寺の三豊中学校で、温かい教師、よき友人に囲まれながら、正芳は中学五年間の月日を過ごすことになる。

その頃、観音寺は人口わずか一万五千弱にすぎなかったが、なんと言っても和田村のような農村とは違って町であった。家と農村を離れ、新しい友人たちと交わるといふ刺激が、正芳の心を躍らせないはずはなかった。

大平のちに、同校の八十周年記念の文集に寄せた文章で、この頃の思い出を次のように書いている。

「……毎日豊浜駅から汽車で通学した。最初は旧式の客車で、ボギー車が通るようになったのは高学年に進級してからであった。いつであったか、東京の大相撲が巡業に来て、汽車に乗る時、各座席の横についておるドアの入口が狭いので、体を横にして乗車している姿を見たこともあった。男子の学生は列車の前半、女子の学生はその後半に乗るのが不文の慣例であった。

観音寺駅前の一貫堂は、当時からパン屋としてその盛況を誇っておったが、われわれは買喰い禁止の校規を破って、しょっちゅう、裏の台所で、ふかし立ての甘い匂いのするパンを食べさせてもらったものだ。やさしかった奥さんの温容が今でもありありと思い出される。

……春まだ浅い卒業や入学の時の人々のせわしい気配、新しく手に入れた教科書のもつ新鮮な感触、有明の浜の水泳や野外演習を彩った友の姿や顔また顔、くずし（かまぼこ）やちくわに濃いぬかの香をもつ新香を添えた弁当の魅力、校庭の隅で時折展開された上級生のランチをめぐる緊張、丸龜中学や西条中学との對抗試合における興奮、等々、母校を舞台とする思い出はつきない……」。

正芳たちの入学は、三豊中学が定員一学年百人制（一クラス五十人で二クラス）をとっていた最後の年に

あたった（大正十三年より定員百五十人制となる）。大正末期にはまだ、県下に五つの公立中学校しかなかった。ここへ入ってくるもの多くは、良家の子弟で、しかも相当に優秀な頭脳の持主であった。

「中学における私のクラスは、……珍しく秀才が多く集まっていた。もともと私は、中の上位の成績で一向にさえなかったが、卒業生八十人のうち、たしか旧制高校に十二、三人、旧制の高専に十四、五人が入学するという記録を残した」。

中学時代の友人たちの多くも、小学校時代の友人と同じく、正芳を「自立たぬ少年だった」と言っている。級友たちは次のように回想している。

「中学へ通学するために通った豊浜駅への野道では、数人連れ立った上級生を先頭に一列になって歩んだ仲間の二人でした。……口数の少ない、溫和しい感傷的な人柄で、目立たない存在でありました」。「逸話がないのがあの人の特徴じゃないでしょうか。われわれの学校では弁論大会などやりましたけれど、そういうものにも出たことはなかった」。「大平さんは勉強も派手でなく、じっくり考える方で、あまり自立ちませんでした」。「あるとき、剣道の先生が、廊下を声高に話しながら歩いている生徒を見て自分の悪口を言ったと思っただけ、竹刀でなぐりつけたことがきっかけで、ストライキが始まりました。いくら当時でも、暴力はひどいということになり、寄宿舎にこもってしまっただけで、授業に出ないことにしたのですが、その時大平さんは慎重論を唱えていましたね」。

級友たちにこのような印象を与えたのは、大平の控え目な性格と慎重な態度によるものであるが、また当時の彼の生活環境にもよっていたと思われる。正芳は、中学に通うようになって、家の仕事を手伝わなければならず、他の多くの生徒たちのように、放課後ゆっくりと学友たちと過ごす余裕はなかったのである。

姉ムマによれば、「稲刈りのときなど、正芳は毎朝三時に起こされ、男衆と一緒に二反くらい刈ってくる。

それから朝飯をかきこみ、弁当も自分でつめて、裏道を駆まで走る。それはとても早くて、いつ行ったのかわからないくらいじゃった。夜は夜で、ガス灯の光で稲刈りをしました。ひとつも大層らしくはせなただけで、もうちょっと勉強させてくれと思つたかもしらんあ。妻稗真田にしても、お父さんが勉強が大事だから、もうこらえてやれと言つのに、お母さんは、正芳が落第しても、編まさにやらんと言つておりました。

多くの友人が正芳の若い頃について、もっぱら「目立たぬ少年」という印象を抱いていたのに対し、少し違つた感懐を持つものもある。

「子供のころの彼は純情無垢の少年で、はにかみ屋、恥ずかしがり屋であつた半面、ときにはびつくりするほどの反発力をもつていた。何かイヤなことをいうと、ブンと反発しておつたね。ときたま意気けんこうに歌や好きな英語の一節を力強く口吟したりして、野性的といふかなんといふか、独自の信念をもつた芯の強いところがあつた。柔道はそう強くなかつたが、精神力は少年のころから不屈なものをもち合わせていた」。

中学も半ばをすぎ、四年を迎えると、もう卒業後のことを考えなければならなかつたが、正芳は、四年に進級して間もなくの夏、ひどい腸チフスにかかり、四力月もの間生死の境をさまよつた。両親の必死の看病の甲斐あつてようやく一命はとりとめたものの、学業はおくれて、成績はクラスの半分以下に落ちこんでしまった。

家の経済を考えるならば、学資の要らない上級学校を選択する以外にはない。正芳は、幼い頃、「にいちゃん、にいちゃん」と呼んで慕つていた本家の従兄、大平秀雄（のち陸軍少将）が陸士出身の軍人だつたこともあつて、自分は海軍を目指すこととした。病気が回復するや、ただちに受験勉強を開始して、翌年春、海軍兵学校の受験を試みるが、試験の前に急性中耳炎に襲われて、身体検査ではねられるという不運に遇つた。

この挫折は、上級学校への一つの道が断たれたことを意味した。正芳の焦燥感はいかばかりであったことだろう。

不運はさらに重なった。正芳が中学五年に進んだ昭和二年の八月二十九日、父利吉が、胃潰瘍で亡くなったのである。享年五十六。

「それはわれわれ家族にとって、突然訪れた不幸であり、致命的なことでもあった。母は病身であり、若い兄が家業を継いだが、途方に暮れていたにちがいない。しかし、母も兄も不幸にめげることはなかったし、また私たち弟妹に細やかで温かい配慮をしてくれたことはありがたかった」。

中学五年という正芳にとってつらい時期のことについては、同期生の一人にこういう思い出がある。

「たしか中学五年のとき授業の合間の休み時間、二人で校庭を歩いていた。その時、大平君が空を仰いで『We must be vivacious!』と言ったんですね。私にはその意味がよくわからなかったので、家へかえって辞書をひくと、『快活な』、『活発な』という意味だった。私はこのとき愕然としました。私が内心一番気にしている欠点を彼に指摘されたこと、もう一つは私の知らない単語を彼が知っていたことです」。おそらく正芳は、このとき、友に対してだけではなく、自分にむかって、Be vivacious!と叫んでいたたのである。

さらにもう一人の同級生は、正芳が、「ただ単に自立たないのではなく、本来の性格として、自分にプレッシャーをかけるようなところがあったのではないでしようか」と述べている。言い換えるならば、自立たないように努めていたということである。これは、大平が後年になって発揮した強い自己抑制力が、すでにこの頃に培われつつあったことを示唆するものである。

不幸の多かった中学の高学年時代も終わりに近づき、自らの方向を決めねばならなかった正芳にとって、学資の要らない進路としては師範学校の二部だけが残されていた。

「ところが、たまたま私の叔母（ヨシ）が、警察官に嫁いで高松市の近郊に住んでいた。自分のところから進学させてよいから、高商を受けさせては……」と勧めてくれた。結局、そうすることになり、卒業とともに旧制高松高商に入学した」。この時の受験生は九百三十二名であり、合格者は百六十一名であった。

なお三豊中学に入学したときの正芳の席次は、百人中四十一番だったが、卒業のさいは七十三人中十九番である。入学者と卒業者の数の異なっているのは、中学五年間の間に、家の事情や病気等何らかの事情による脱落者があったためと、当時の制度により、中学四年生から上級学校へ受験・入学した優秀な学生があったためと推察される。正芳の席次は、「中の中」かせいぜい「中の上」といったところではなかっただろうか。因みに、卒業時に成績のよかった学科は、国語〃90点、漢文〃88点、英作文〃87点等であり、よくないのが、化学〃65点、英訳〃68点、代数〃69点等である。